

1 論点に応じた準備を

令和7年8月、中教審教育課程企画特別部会より「論点整理」が公開され、次期学習指導要領に向けた基本的な方向性が示された。

このことを受け、令和8年度中を予定している中教審答申及び学習指導要領の告示に向けた作業が進むことになる。

教育現場では、今回の論点整理が多岐にわたっていることから、十分に時間をかけて吟味することが必要となる。

各学校においては、今回の公開を機会に、東京都が掲げる「誰一人取り残さず、すべての子供が将来への希望を持って自ら伸び、育つ教育」を目指すことと絡め、「未来の東京」に生きる子供の姿の実現に向け、論点に応じた準備を進めていくことが求められている。

また、「自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の創り手の育成」を喫緊の課題として示していることから、校長は、論点整理を踏まえ、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させることに注力し、これまで以上に「成績主義」や「同調圧力」への偏重から、脱却することを目指さねばならない。

2 新たな観点別評価のイメージ

今回、新たな観点別評価のイメージとして、「学びに向かう力、人間性等」を目標に準拠した評価から個人内評価として評価に加味しない方向性が示された。

このことにより、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の2観点のみが目標に準拠した評価となる。

そのため、「学びに向かう力、人間性等」は目標に準拠した評価を行わず、個人内評価として所見に反映することになる。

今回の変更に向けた議論にあたり、「学びに向かう力、人間性等」は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の二つの柱を、どのような方向で働かせるかを決定付ける重要な要素であるとの見解があったことも根拠の一つである。

これらのことは、指導要録の評価・評価の様式変更に留まらない、評価本来の意義等について、踏み込んだ検討が必要な状況にある。

3 学びに向かう力、人間性等に係る個人内評価

その他にも、論点整理により、教育課程について幅広い言及がなされたところであるが、本稿では、「学びに向かう力、人間性等」が再整理されたことから、学校が取り組むべき「学びに向かう力、人間性等」に係る個人内評価の進め方に焦点をあてて提言する。

現行では、「学びに向かう力、人間性等」の学習評価の観点として、「主体的に学習に取り組む態度」が設定されたが、目指す資質・能力を適切に反映した評価になりにくかったとの指摘があった。

このことは、「粘り強さ」や「学習の自己調整」が事後的に整理されたことが影響した

とされている。

そのため、子供が、高い評価を得たいがために勤勉さのアピールやノートの提出の頻度を増やし、教師の期待に沿う学び方を過度に意識するようになり、その結果、『学びに向かう力、人間性等』の本質から乖離した実態も見られた。

今回の再整理は、こうした『評価のための学習』を助長しかねない状況からの転換点となる。

評定に直結しなくなるからこそ、子供たちは他者の目を意識したアピールをすることなく、真に学びの「自己調整」や「粘り強さ」を発揮しやすくなる環境が整うと言える。

また、各種調査から、我が国の子供たちの課題として、「自分の力で解決しようと考えること」や「いち早く結果を目指すのではなく、まず行動を起こすこと」への意識が低いことから、子供たちの学びへの向き合い方や課題解決に向けた取組み方に、新たな課題が生じているとの指摘があった。

この点からも、子供の意識を改善するための評価とするために、「学びに向かう力、人間性等」の評価の在り方を整理するに至った経緯がうかがえる。

一方、学校によっては学習状況の評価に形成的評価を取り入れ、学習の取組姿勢を個人内評価として、通知表とは別に個別に伝える取組が報告されている。

各学校は、「学びに向かう力、人間性等」の評価の在り方について、多面的・多角的な評価の視点を組み込みながら評価の改善に注力するべきである。

4 「学びに向かう力、人間性等」を構造化

今回、論点整理の公表には、中教審教育課程企画特別部会での議論が重ねられ、「学びに向かう力、人間性等」の学習評価について、委員からの意見をもとに、教育現場での活用に向けた具体的な整理がなされており、図での説明が加えられているのが特徴的である。

この構造化は、これまで曖昧に捉えられがちであった『学びに向かう力』を、教師が共通理解をもって観察・支援するための具体的な『視点』を提供するものである。

校内研修や授業研究会において、子供たちの変容を捉えるための極めて実践的なツールとなり得る。

特筆すべきは、「学びに向かう力、人間性等」の再整理にあたり、「学びに向かう力、人間性等」を構造化して明確に4つの要素（「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」「他者との対話や協働」「学びの主体的な調整」「学びを方向付ける人間性」）として、整理イメージを表していることである。

このイメージから、学びに向かう力、人間性の高まりを目指すために、4つの要素を相互に往還させることの重要性が理解できる。

評価イメージには、「変化が激しい不確実な社会の中で、学びを通じて自分の人生を舵取りし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育む」とある。

教育現場では、人間性の高まりを目指し、豊かな学びにつながる学習評価に主体的に取り組むことが求められると考える。

以下に個人内評価として記録する際の例文を私見として示す。

＜「学びに向かう力、人間性等」の評価例＞

◆国語読解教材「ごんぎつね」（第4学年）

① 初発の思考や行動を起こす力・好奇心の評価【導入時】

・人間と動物との心のふれあいを題材に扱った物語を想起し、登場人物に係る記述もとに人物の心情に迫ろうとしている。

また、叙述をもとに自分なりの解釈で読み進めようと考えている。（②③④との往還）

② 他者との対話や協働の評価【物語の第一段落】

・「ごんぎつね」が、冒頭部分で「小ぎつね」と表した作者の意図について、友達と協働しながら考え、対立した意見があった場合でも、相手の考え方に共感しながら対話を進めている。（①③との往還）

③ 学びの主体的な調整の評価【単元全体を通して】

・上記②に係る件と関連して物語の読解にあたり、自己の意見を主張しつつも、対話等を通して、場合によっては揺れを自覚し、自身の考え方を調整・修正しながら興味をもって読み進めようとしている。（①②との往還）

④-1 学びを方向付ける人間性の評価【単元の終末】

・自身の考えを登場人物に投影させながら、生死の概念について自分なりに考え、より良く生きるために思考を繰り返している。（①②③との往還）

⑤-2 学びを方向付ける人間性の評価【並行読書「てぶくろをかいに」】

・作者の動物観について考察するとともに、人と動物との関わりから、共生社会の視点や環境問題、ウェルビーイングなどへ考えを広げ、自身の豊かな人生やより良い社会の構築に向けて人間性を高めている。（①②③との往還）

本稿で示した評価例は、あくまで4つの要素に基づく一例に過ぎない。

重要なのは、各学校において、こうした具体的な視点をういた評価が、単なる「指導要録の所見記述」という作業に終わらないよう、日々の授業における教師の働きかけや、子供たちへの具体的なフィードバック（形成的評価）に確実に繋がっているかを、教職員と共に問い続けることである。

参考文献

中央教育審議会教育課程企画特別部会（最終閲覧2025.11.28）「論点整理」

https://www.mext.go.jp/content/20250925-mxt_kyoiku02-000045057_01.pdf